
夢の中の「日常」

笠原綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中の「日常」

【Zマーク】

Z2580M

【作者名】

笠原綾乃

【あらすじ】

「家のすぐ近くにある」　ただ、それだけの理由でバイトを始めた斎藤菜緒子は、突然、そのテーマパークの顔である『姫』に抜擢される。すべてが慣れないことだらけの菜緒子が日々の中で感じる戸惑い・不安。そして……。　この作品は沢木香穂里さま主催の『職業小説企画』参加作品です。ぜひ、ほかの職業ものぞいてみて下さい

なお、この作品は作者である笠原の経験をもとにしていますが、実在の人物、場所、および出来事とは一切関係ありません

1 お姫様

「いらっしゃいませ」

午前9時。正門前。

この挨拶で私の1日は始まる。

「あ！ お姫様だ」

「この子たちと写真撮つてもらつてもいいですか？」

淡い桃色に、無数の花びらをあしらつた着物に、きらびやかなかんざしを飾つたかつらをかぶつた私に、たくさんのお供たちが寄つて来る。

「では、拙者がシャッターを押しましょ。よろしいですか。はい、ポーズ

取り囲む子供たちと、笑顔で写真に収まる。

これが、私の「日常」。

ここはある観光地にある、江戸時代を体感できるテーマパーク。私は、斎藤菜緒子さいとうなえこは、毎日ここで『お姫様』として働いている。

きっかけは、ささいなことだった。

就職先が決まらないまま高校を卒業した私は、『家のすぐ近くにある』 それだけの理由で、ここに飲食のテナントにバイトで入つた。

働き始めてから2週間たつたある日、視察に訪れていた運営会社の社長の

「この子、明日からお姫様やらせなさい」

ツルの一聲で、私は『お姫様』になることが決定した。

1回目 「場内散歩」が終わって、休憩をしに衣裳部屋へ戻る。壁を一周する鏡に映る棚には、きらびやかな衣裳が整然と置かれていって、そのさらに後ろには、たくさんのかつらが並んでいる。時代劇でよく見る武士・町人・町娘・お姫様から花魁まで。その下には結う前なのか、長い髪の毛が垂れ下っているかつら、そして作り始めたばかりなのか、髪の毛がついていない、金だけのものもあつて、けつこう不気味だ。

「あ～あ、暑くてやになっちゃうよね。飯島さん、お茶ちょうどいい」矢絣の着物のすそを上げた腰元役の女の子が、すぐ後ろでかつらを整えている床山の男の人に、鏡越しに話しかける。

「純ちゃん、それくらい自分でやんなさい」

「おでこを手拭いでぬぐいながら、田を離さずにはやり返す。

「はいはい。バイトさん、あなたもいる？」

「あ、はい。お願いします」

私は深く頭を下げた。すると、かつらがずれたのがわかる。

「斎藤ちゃん、それがぶつかるときは深く頭下げちゃダメ。何度も言つたらわかるのさ」

飯島さんの鋭い声が飛んだ。

「それ、外したら？　まだまだ1日は長いんだし」

純ちゃん、と呼ばれた女の子が、慣れた手つきで私からかつらをはずし、台の上に置いてくれる。

「ありがとうございます」

顔を上げた私は、白と紫の布で坊主のように巻かれた頭を見て、小さくため息をついた。

『お姫様』をやりだして1ヶ月が経とうとしているのに、未だに慣

れない。

かつらをかぶる前に頭につけるこの羽二重も、きついドーランも。ここに来るまでは浴衣しか着たことないのに、いきなり裾の長い着物を着せられて。帯もきついし。

おまけにこのお姫様のかつらは私に合っていないのか、おでこの上あたりに金の部分が当たってすぐ痛い。

「何で私、こんなことしてんんだやつ……？」

「はい、どうぞ」「すみません」

私と同じような頭をした純ちゃん、にもらつた紙コップのお茶をちびちび飲んでいると、衣裳担当の中年の女性、田島さんが、大きな風呂敷を抱えて入つて来た。

「何だ純ちゃん。今日こりだつたの？」言つてくれればよかつたのに

「え？ 部署から連絡来てなかつた？」

「たのよ」

「『めん田島さん。あとでシメとくわ』

「こらこら。あまり脅かすな。ただでさえ後輩連中君のこと怖がつてるのに」

大きすぎる荷物を乱暴に置いた田島さんの後ろで、飯島さんが笑う。

「これくらい言つてやんないと同じこと繰り返すの。だいたい、私が新人の頃はもっとときつかつたのに」

「今の子は何があるとすぐ辞めるからね。やつと衣裳整えたと思つたら『辞めます』だもの」

「それはこっちも同じだよ。なかなか合つかつらがなくてようやく探したのに『お世話になりました』もなしに辞めるんだから」

「だいたい、入ったばかりで何も出来ないくせに、すぐに舞台に出れるなんて思つてるのが甘いの」

純ちゃん、が一氣にお茶を飲み干した。

「バイトさん、おかわりいる？」

「あ、これで大丈夫です」

私がバイト、だからなのか。ベテランのよつなのに何かと純ちゃん、は世話を焼いてくれる。

「ま、でも斎藤ちゃんは根性ありそだから大丈夫か」

かつらを整えるくしを耳にひっかけた飯島さんが、ずり落ちたメガネを上げて笑う。

「うん。この子笑顔がかわいいってお客様さんからも評判いいみたいだしね。続けてもらわなきゃ困るわよ」

語尾を少し伸ばした田島さんが、細い目をさらに細くして納得したようにうなずく。

「へえ。この子、だから『姫』なのか。どうりで、ウチの新人に声かかなくなつたわけだ」

まるで値踏みをするよつな純ちゃん、の目線に、いたたまれなくなつた私は思わず目を伏せる。

「斎藤ちゃんが気にすることないわよ。だいたい、姫を【部署】にいたくないための逃げ場【】にしてる子にされてもねえ」

「そうそう。気を抜いて姫やつてる子が一番扱いに困るんだよ。下手にプライド高くつてさ」

飯島さんと田島さんが、顔を見合させてため息をついた。

「やっぱそつなんだ。外の仕事も口クにできなくて。ああ！ もづー！」

純ちゃん、の大きな声が衣裳部屋に響く。

それと同時に、側用人姿の中年の男性が、声をかけて来た。

「そろそろ【2回目】行きましょうか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2580m/>

夢の中の「日常」

2010年10月12日18時37分発行